



Title	＜書評＞「あざやかな退任」（高杉良著，集英社文庫，350円）
Author(s)	和泉，道代
Citation	大阪公衆衛生. 1991, 60, p. 19-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83617
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『あざやかな退任』

高杉 良著（集英社文庫 350円）

私は日頃は歴史小説を読むのが好きである。でも気分転換にと読んだこの本は、スカッとした気分になりました。

この本は、エレクトロニクスのパーツ・メーカーのワンマン社長の突然の死から始まり、その会社の後継者問題のいざこざ、その中で前社長の意をくんで、実直誠実に今後の会社のことを考えて行動する副社長宮本、この際に大企業に吸収を企てる野村常務、このふたつの派閥の間でゆれうごく役員たち、その他正義感も強く仕事に突進している吉田、常に常識的に考え行動し宮本副社長を信頼している鈴木、積極的に先手を打ってくる悪役の佐竹、その佐竹をピシッと押さえる大物矢野、とにかくひとくせもふたくせもありそうなわき役で物語を盛りあげている。

結果は副社長宮本の考えどおりドンデン返し、会社が大企業の吸収されることなく、現在の会社をより発展できるような役員の人選を考え、副社長は自分が社長になれるのをみすみす見送って、後輩に道をゆずった。本の題名どおり「あざやかな退任」であった。

この本を読みおえたとき、「あーしんどかった、でも気分爽快、ゆっくり休養でもしようか」の気持ちであった。

これは近代企業の中の問題であったがすべての社会、事業所で同じようなことが行なわれていると思われる。この副社長は、義理人情を大切にする浪花節的な古い考え方であるものの先輩の業績を大切に、それをよりよい方法で後輩に引き継ごうとしている。現代の殺伐とした世の中で人間の真の心、一種のオアシスを見つけた感じである。

この副社長を側面よりフォローした財界の大物矢野に対しても盛大な拍手をおくりたい。

（大阪市西淀川保健所 和泉道代）